

【おはよう！】

マーサは朝から元氣だ。アルはシートからモゾモゾと這い出してくると、カーテンレールに逆さまにぶら下がった。蝙蝠を見つけてもマーサは驚きもせず【いつの間に連れてきたのかしら】と首を傾げただけだった。

【そういえばアキラは朝食を食べてたけど、アルはいらなかったのかしら？】

ブツブツと呟きながら、マーサはシートをはぎ取った。中から出てきたアルの下着や服を無言で畳み、新しいシートと交換して整える。こんなに広い豪邸なのに、ルームのベッドメイクはマーサがしているようだった。

アルは開いたドアから外へ出て、廊下からリビングに向かつて飛んでみた。暁の姿は見えない。部屋数がかくが多いので、他の部屋に入られていたらわからない。飛び回って捜すのにも疲れて、アルはリビングに戻ると、ソファに置かれたクッションの上にべたりと腹這いでとまった。ソファが蔓つたのような天然素材でできているので、布地部分の方が柔らかくて居心地がいいのだ。

夜、リビングのローテーブルには、空き缶が山のように積み重ねられていたが、今は綺麗に掃除がされている。昨日、リリーの話をしていたせいか、またリリーの映画が見たくなってきた。ソフトがまだ機械の中に残っていたら、電源を入れて再生ボタンを押すだけで、続きが見られるかもしれない。アルはまず、テレビリモコンのあるローテーブルに飛び下りて、鼻先でボタンを押してテレビの電源を入れた。途端、賑やかな笑い声がリビングにこだまする。

足音が近づいてくる。ジーンズに濃い色のカットソーを着たスタンだ。スタンリビングを見渡し【誰もいないのか】と呟いて、テレビの電源をプチッと切った。

【んっ？】

目が合った。スタンはびたりと動きを止める。その目に殺気を感じ、アルは慌ててカーテンレールまで飛んだ。スタンは窓際まで歩いてくると、カーテンのアルをじっと見ていた。しばらく何か考え込んでいる風だったが、スタンはソファまで戻ると、クッションを手に戻ってきた。スタンは背が高いけれど、いくらクッションを使っても自分には届かないだろうと思っていたら、いきなりそれを投げつけられた。

不意打ちを食らって、アルはクッションと共に床に落ちた。クッションが緩衝材になつて怪我こそしなかったものの、スタンに驚づかみにされた。

【ギャッ】

アルは精一杯愛想よく鳴いてみたが【気持ち悪いな】とチツと舌打ちされただけだった。スタンの目には優しさが無い。今にも首をへし折られそうで怖い。折られても死なないけれど、痛いのは嫌だ。できることなら回避したい。

カツカツと足音がして、マーサが階段を下りてくるのが見えた。アルは【ギャーッ　ギャーッ　ギャーッ】と大声で鳴いた。

リビングの前を通りかかったマーサが、フツと足を止めた。

【スタン、今の鳴き声は何？】

【ああ、蝙蝠が家の中に入ってきてるんだ。すぐに始末するよ。こういうのは一度巢を作ると厄介だから】
【ちよつと待って！】

マーサが慌てて駆け寄ってくる。アルは助けを求めるように「ギャツ　ギャツ」と鳴いた。

【この蝙蝠、アキラのペットじゃないかしら？】

【ペットって……これが？　じゃあアキラはこの蝙蝠をわざわざ日本から連れてきたっていうのかい】

【そうなのよ。前から変わった子だと思ってたけど、飼ってるペットもちよつとおかしいのよね。可愛がっているようだから、放してやっつてちょうだい。シカゴにいる時も家具を汚したり、傷つけたりもしなかったし、ちゃんと躡^おけているからフンは決まったところにするんですって】

マーサにそう言われ、ようやくスタンは手を離してくれた。カーテンレールに戻ったアルを、スタンは相変わらず気味悪そうに見上げているものの、殺気だけは幾分薄れた気がする。

【アキラはやっぱり変わってるな】

腕組みをしたまま、スタンはしみじみと呟いた。

【年寄りみたいに偏屈で愛想はないけど、優しくていい子よ】

マーサが抗議すると、スタンは【悪口のももりはないんだよ】と肩を竦め、リビングを出ていった。マーサのおかげで、何とかスタンにも蝙蝠の存在を認識してもらえた。それにしてもあの目は怖かった。蝙蝠が家の中にいたら、追い払おうとするのは普通の反応だとしてもあの殺気はないだろう。昨日は暁のために夕食を準備してくれたことを考えると優しさと怖さのギャップが大きすぎる。

アルがぶら下がったまま悶々と考えていると、マーサがパケツとクロスを手にしてリビングに戻ってきた。何をするのかと思えば、窓の拭き掃除をはじめた。

【何もしなくても、家って汚れていくものね。特にリビングは人が集まる場所だから……】

マーサは思いつきり手を伸ばしているけれど、そのちよつと上にある汚れになかなか届かない。

【脚立がいるかしら……】

呟きながら爪先立っているマーサを見るに見かねて、アルは傍に飛んでいった。雑巾を鼻先に引っかけて、手が届かなかった部分を擦ってやる。綺麗になったので、雑巾を落として返し、カーテンの途中、低い位置に逆さまにぶら下がった。マーサは瞬きもせずじつとアルを見ている。

【あなた、手伝ってくれたの？】

アルは「ギャツ」と答えてみた。

【すごいわ、返事をするのね！】

マーサはアルに近づいてくると、優しく触れてきた。アルが嫌がついていないとわかると、そろそろと撫でてくれる。お礼にアルは鼻先をマーサの皺だらけの小さな指の先にスンスンと、甘えるようにして擦りつけた。

【あら、可愛い】

可愛いと言われて、悪い気はしない。アルの経験上、男の人よりも、女の人の方が自分を「可愛い」と言ってくれる割合が高い。アルは好感度を上げようと、小首を傾げて「ギャツ」と甘めの声で鳴いてみた。

【この蝙蝠、本当に人の言っていることがわかるのかしら】
マーサが頬を押さえて呟く。アルは理解していると証明するために、大きく頷いてみせた。マーサはそんなアルの顔を覗き込み、ニッコリと微笑んだ。

午後二時過ぎ、アルがぐつたりと俯せたままキッチンでマーサのお茶の相手をしていると【マーサ、マーサ】と晧の音が聞こえた。

【どうしたの、アキラ？】

朝からずっと留守にしていた御主人様が、キッチンに現れた。定番の黒いパンツと白いシャツ、その上に上着を着ている。

【アル……いや、俺の蝙蝠を知らないか？ どこにもいな……】

晧は喋っている途中で、マーサの向かい、タオルの上に俯せになっているアルに気づいた。

【……マーサ、俺の蝙蝠と何をしてるんだ？】

【お茶をしているの。この子つてとっても頭がいいのね】

アルはタオルの上から飛び立つと、晧の肩に飛び乗った。これ見よがしに「ギューツ」とため息をついてみせる。

【その蝙蝠、人懐っこくてとてもお行儀がいいじゃない。しかもこんなに役に立つなんて思わなかったわ】

晧は首を傾げた。

【こいつが役に立つだつて？】

【そうよ。掃除を手伝ってくれたの】

半信半疑の眼差しで「そうなのか？」と聞かれる。アルはコクコクと頷いた。正確に言うと、マーサに半ば強制的に手伝わされたのだ。

最初のうちこそ喜んで掃除の手伝いをしていたアルだったが、まさかマーサがこんなに蝙蝠使いが荒いとは思わなかった。アルは全身をモップで覆うというかつこ悪い姿で、背の低いマーサの手の届かない窓硝子の上でコロコロと数百回は転がり回った。

【すごい、すごいわ！】

喜んでもらえるのは嬉しかったが、時間が経つにつれて当然ながら疲れてきた。体が小さいので、窓拭きは全身運動になる。折に触れ「ギャッ ギャッ（疲れたよ）」と訴えてはみたのだが、蝙蝠の言葉は通じない。結局、アルはマーサの気がすむまで掃除に付き合った。

晧は外から帰ってきたばかりのようだったのに、アルを連れてガレージに置いてあるBMWに乗り込んだ。再び出かけるようだが、アルが「ギャッ ギャッ（どこに行くの？）」と聞いても、何も教えてくれなかった。